

# モノの世界から見た中東文化・イスラーム文化

## 住まい方を中心に

縄田 浩志

### 概要

2004年11月19～20日、国際セミナー「モノの世界から見た中東文化・イスラーム文化—住まい方を中心に—」(The Middle Eastern and Islamic Worlds as Seen in the Context of their Material Cultures)が(財)中近東文化センターにおいて開催された。毎年一回「紅海文化とナイル文化」というテーマのもとに、エジプト調査関連公開研究会が行なわれてきた。第12回目にあたるこの年は、国際交流基金の「中東知的交流セミナー助成」プログラムの助成を受けて、エジプトとアメリカからの研究者を迎えて活発な議論が繰り広げられた。建築に関する伝統は、土地、自然環境との関わ

りのなかで、宗教、政治を越えた文化伝統になっていることに注目し、住まいや住まい方をさまざまな側面から捉えることが、テーマとして掲げられた。(プログラムは下記)

シカゴ大学オリेंट研究所のドナルド・ウィットコムは、イスラーム考古学の指導的役割を果たしてきた研究者であり、エジプト紅海沿岸の都市遺跡クサイル、ヨルダン紅海沿岸の都市遺跡アカバの発掘者として多くの功績を残してきた。エジプト文化省考古最高会議イスラーム・コプト考古局長アブダッラー・カーミル博士は、モスクを中心としたイスラーム世界全域またエジプトにおける建築史の専門家である。

### プログラム

- 開催趣旨……………川床睦夫(中近東文化センター主任研究員)
- 人の移動と交流が作り出す文化……………家島彦一(早稲田大学大学院特任教授)  
—アラビア海のダウ船貿易に関する現地調査から
- イスラーム考古学とイスラーム都市の展開……………ドナルド・ウィットコム(シカゴ大学オリेंट研究所助教授)
- 第24次ラーヤ・トゥール地域の考古学的調査報告……………川床睦夫
- 芸術的伝統、環境要因とその相互的影響関係から見たアイユブ朝末期以前のアジアとアフリカにおけるイスラーム建築……………アブダッラー・カーミル(エジプト文化省考古最高会議イスラーム・コプト考古局長)
- 日本の住まい—中世絵巻物にみえる住まい……………河津優司(武蔵野大学教授)
- ゲミレル島周辺のビザンティン遺跡……………浅野和生(愛知教育大学教授)  
—都市と聖堂の立地
- 早稲田大学エジプト学研究所による2004年の発掘調査報告……………近藤二郎(早稲田大学教授)
- アコリス調査隊による2004年度の発掘調査報告……………川西宏幸(筑波大学教授)
- パネル・ディスカッション……………新井勇治(国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員)／板垣雄三(東京大学名誉教授)／ドナルド・ウィットコム／アブダッラー・カーミル／西本真一(早稲田大学助教授)／牟田口義郎(中近東文化センター理事長)／川床睦夫(司会)

以上のように、本セミナーのテーマは住まい方にあった。ただし、住まい方を始まりとして「モノの世界から見た中東文化・イスラーム文化」という枠組みのもとに、これからも連続したセミナーを続けていく方向性が示された。そこにはどのような展開が期待されるのか。以下では、川床睦夫、家島彦一、板垣雄三による発表内容とコメントを紹介したい。

### 「モノの世界」から見る（川床睦夫）

なぜ今、「モノの世界」から中東文化、イスラーム文化を見直すことが必要なのか。そこには「現在の中東世界、イスラーム世界に対する報道、認識というものは、対立、対決を促進する方向に向かっていくという危機感」があった。「モノの使用は、人類の誕生にとって欠かせない必要条件でした。この原点に立ち返り、物質文化の世界から、自文化と異文化を見つめ直す必要が痛感されるのです。政治、宗教、経済の変動を超えて、継続されてきた基層文化の中に、異文化理解、異文化尊重、文化交流のカギが隠されていると考えるからであります。イスラーム＝テロリズム、不毛の沙漠と好戦的なベドウィンなどといった、イスラーム世界理解にとってマイナスのイメージを取り払うためには、同じ土俵に立つてみるための装置、器具が必要」である。したがって「時間がかかることは承知の上で、モノを通じての相互理解と、そして文化交流の道を探りたい」というのが、本セミナーを企画・開催した川床睦夫の意図するところであった。

では「モノの世界」とは何か。建造物、都市、服装、楽器、土器、陶器、ガラス器、金属器、石器、木器、皮革、織物、玩具など、現実に見えぬものがまず挙げられる。ただし、中国陶磁器、ラスター彩陶器、高価な絨毯、噴水のある邸宅、宝石、貴金属のようなものよりも、その時代の生活雑器としての単色釉陶器、土器、織物やムシロ、一般的な住宅などにむしろ焦点をあてることが強調された。なぜならば、「五感で感じる世界、すなわち、目で見える、耳で聞く、舌で味わう、鼻で嗅ぐ、肌に触れて感じる、こういう世界」と密接につながっているからであり、「政治思想、宗教教義などとは関わりなく生きていた圧倒的多数の人々は、容貌、服装、ことば、生活にまつわる匂いなどの五感で感じる世界から異文化と接触し、

異文化を理解、あるいは誤解してきた」からである。

したがって、「我々は文化の基層にある衣食住を中心とする生活文化、生活技術に眼を向け、文化の底流に流れるものに触れ、相違点だけではなく、共通性、類似性を見出し、そこから異文化を見つめ直す必要があるのではないのでしょうか」という問いかけがなされたのである。

### 「文化交流学」の提唱（家島彦一）

「文化」とは物質文化を主に指し「人が自然およびモノと関わることで生み出されたもの（成果）」であると定義づけた上で、家島彦一は「文化交流学」という新しい研究上のパラダイムを提起した。「文化交流学」は「それぞれの地域には固有の価値を持った文化があること、それを十分に認めた上で、他の異なる文化価値をも同時に認める『相互関係性』の学」であり、「地域の固有性の発見のための地域研究や、地域と地域との間の価値の比較研究だけにとどまらず、繋がり方、結び方、広がり方、相互補完性などの原理を相互的に考える関係性そのものに着目した研究、関係学であり、出会いのメカニズムの研究、出会いの接点の研究であり、いわば広い意味でのネットワークの研究」である。

ではなぜ「文化交流学」か。「文明の衝突」、「文化相対主義」、「地域個別主義」に代わる、「地域間研究」と「共存・共有の思想」が必要だからに他ならない。「地域研究や相対主義的な考え方をどこまでも推し進めて行くと、結局、固有文化の価値を認め、強いては文化の排他的側面、否定的側面が表面に出てくるのではないだろうか。そして、固有文化と固有のアイデンティティの主張は異なる文化のぶつかり合い、文化・文明の衝突という問題に議論が結び付き、展開して行く恐れがあるし、少なくとも文化の衝突の問題を解決する積極的な手段、思考方法とはならないのではないかと私は考えている。まさに今、世界の各地で起こっている様々な事件、緊張・対立・摩擦・戦争・紛争・闘争の原因は、多かれ少なかれ異なる多様な文化の主張と固有のアイデンティティの衝突にあると捉えられ、理解されているからであり、そうした考え方の基本は、やはり文化相対主義的な考え方、地域個別主義的な思考に根差している」と考えられるのである。

それでは、アラビア海周縁部に生きる人々の間に「共存・共有の思想」が生まれ、ダウ・カルチャーの世界に象徴されるような、人・モノの相互依存関係の網の目（ネットワーク）に覆われた世界が長期間にわたって持続してきた基本要因とは一体、何であったのか。「多様性および様々な差異にある」と考えている。そして多様性および様々な差異を個々の文化的価値として認め合う相互の関係性のなかから、異文化および違い（差異）そのものを自分、自己の中に取り込み、また同時に他者に提供するという『give and take』の相互の交換関係、言い換えるならば自者と他者の相互の持つ個々の文化価値を平準化・平均化しようとするダイナミックな運動、すなわち『交流』という現象が生まれ」てきたからである。

まさにそのような世界を生きた代表例が、14世紀の大旅行家イブン・バットゥータであった。「イブン・バットゥータの旅は、多様な異なる人・もの・文化の出会いと付き合いの旅であり、学びの旅でもあった。学びの旅とは、他者の異なる常識、価値を認めて、自己のものとし、同時に自己の価値を確立して、他者に提供するという相互交換関係の旅、交流の旅のことである。当時のイスラーム世界には、他者、客人を柔軟に受け入れるための多様な『つきあい』もしくは『もてなし』の文化、相互依存関係の網の目があったと考えられる。[中略]そしてイブン・バットゥータがイスラーム世界を広く旅行することが出来るのは、何よりも先ず彼がその世界に広がる、つきあいともてなしに基づく、人と人との相互依存関係の網の目、壮大なネットワークの広がる世界を巧みに利用したからであると考えられる。だからこそ、イブン・バットゥータは30年間にわたり、しかもイスラーム世界全域の旅を実現できた」のであった。

#### 「多即一」（板垣雄三）

このセミナーの最後には、板垣雄三が締めくくりの総合コメントをした。そこでは、川床睦夫が提起した「モノの世界」から見るということ、また家島彦一が提唱した「文化交流学」など、本セミナーでの議論に対して「破壊する目的で言っているのではなくて、逆にもっとそれをサポートするために言おうとしている」として、以下のようなコメントがなされた。

「方法論の問題について、やはり evidence とい

うことが今回のこの会議で非常に大きな問題であったというように私は聞いておりました。これまではテキストかアーティファクトかという、これも何となくどこかで二項対立的な感覚で問題が立てられている所で、evidence というものについて、学問にとっては決定的な大きな意味をもつ evidence というものについての考え方が、何となく分裂していたのではないかという気がするのです。例えば今や情報デザインなど、ネット上でやりとりされる情報というもののメッセージを、どうデザインするかという次元の問題まで我々の視野の中に入れてこなければならぬ。そういう時代の中で、いわば evidence というのは、だんだん広い意味で、アーティファクト化しつつあると言えます。そういうことでちゃんと固められる議論でなければ evidence としての力を持ち得ないのではないかと。そうすると歴史研究全般の考古学化ということが、これからは問われることになるだろうと思います。歴史学という広い範囲の中のどこかのコーナーに考古学があるとか、historical archaeology とか、そういうことではなくて、歴史学の考古学化」そして「知全体の考古学化」こそが今後の課題であると位置づけられた。つまり、「モノの世界というのは、我々が普通に考えている時のモノよりももっと広がるのです。人工物としての都市は言うまでもありませんが、法も制度も人工物の側面をあらわにしてくる。マルクスではありませんが物象化 Versachlichung というか、モノの中に人間のいろいろな能力や人と人との関係などが埋め込まれているわけなので、モノの世界の中にもあらゆるものが入ってしまっている、人生も宗教も宇宙も全部入ってしまう、そういうようなモノを考え」なければならぬという考え方が出されたのである。

つづいて、井筒俊彦の最後の仕事『意識の形而上学—「大乘起信論」の哲学—』を引き合いに出しながら、「一つにすること」、「多即一」、「多元の普遍主義」というとらえ方により、これまでの議論を発展させていく道が板垣雄三によって示された。「モノの現れ方というのをどういうふうに見るかということですが、フィジカルなものを徹底して考え観察していこうとすると、いやおうなく metaphysics にまでも進んで行ってしまうということになる。そういうふうにして、我々はモノ（形而下）の世界を中心にして考えると、やがて形而

上までひっくりめられた所で我々はモノの世界を考えなければならぬし、まして中東の文化やイスラームの文化について考えようとするならば、なおのことその覚悟がなければならぬのではないかと、そのようにも思っているわけです。そうすると、イスラームのタウヒード、さっき言いました複合的なアイデンティティというものを中東の人々は絶えず使い分けながら、それを自己責任でコントロールしながら暮らしている、それが住まい方にも現れているわけです。そういうものの土台にある、『一つにすること』、私は『多即一』と説明してみたり、**the many**と**the one(ness)**とが**integrate**される多元的普遍主義 **pluralistic universalism** というように言い換えてみたりもしていますが、そういうものの考え方、生き方から都市性や近代性、個人主義、合理主義、普遍主義や、都市化、商業化、政治化の契機など、様々な、我々がずっと受けてきた教育では全部ヨーロッパから出てきた近代的価値のように思い違いしてきたものは、基本的にタウヒードの論理から出発していたのです。今日、二項対立の克服とかネットワークングとかパートナーシップとか市民社会が流行語になっていますが、こういう思考法は全部タウヒード

だと言ってよい。**Bio- and cultural diversity** だとか、そこからくる文明間の対話だとか、**environmental and ecological harmony** とか、そこから来る『個』的なるものが尊厳性を持っている、人間の問題だけでなく、宇宙万物の個的なるものが、何故の次元が『個』なのかという、これもいくらでもアイデンティティ複合で使い分けられるわけですが、そういうようなことの次元で人の動き方や関係の持ち方を考えていく考え方が強まってきました。それは昨日家島先生が議論されたことに繋がるわけですが、そういう問題にまで行くのではないかと思います。そうすると川床先生が我々に投げかけてくれた共同の目標としてのイスラーム考古学というのは、人類の知全体を作り変える、そういうところでのパイオニア的なミッションを持っているように思います。私の広げて見せた風呂敷に、川床先生は少し渋い顔をしていらっしやいますが、これで終わります」。

#### 〈参考文献〉

川床睦夫編『国際セミナー「モノの世界から見た中東文化・イスラーム文化―住まい方を中心に―』財団法人中近東文化センター 2005年。

(なわた・ひろしノ鳥取大学乾燥地研究センター)